

書こうと思ひかへした。

彼は錦町の警察から連れ出された翌日、高田の馬場から、汽車に乗せられたのである。

辻潤は『又来るから、君はもう死んでも好いぞ』と言つて歸つた。

『野田さんが姉さんを連れて、川崎へ來られたんですよ』

僕はコシマ・キヨに言つた。

『僕が今度元氣になつたら、一遍御馳走して下さいね』

しかし僕の精神は馬鹿に張りがあつた。

僕は観音經をやりつゞけ高田の馬場で、汽車の來るのを少し待つてゐる間でも、

『短刀に突き刺されても俺は死なゝい、短刀を眞ぐに引き抜くから、肉が直ぐにヒツツキ血が通

ふ——』とか。

『俺は飛行機から墜ちても死なゝい、墜ちるなと思つて、息をしないで目を瞑つてゐる。足が地に付く、降りたなと思つて立てば好い——』とか。

『俺もう此んなくだらない東京などには二度と來ない。俺の聲は大隈の千摺聲とは違ふから覚え